

被服と自己呈示——「自己」の変容——

学籍番号 19051012 長谷川祥子

指導教員 立木茂雄

## 要旨

私たちは、生活する中で多くの他者とすれ違う。その際に、私たちはその人物かどのような人物であるかを、外見を通じて構築していく。私は、自分が他者の印象を外見を通じて形成していくように、他者によって形成される「自分自身」に興味を持った。最も身近である「自分自身」を対象として、自分自身がどのように自己を呈示しているのか、自らが第三者となって客観的に「自分」を見つめたいと考えた。そこで、外見を形どり、私たちの身を守るものであると同時に、「私たち自身」を表す、「被服」を「自分」を探る手がかりとして捉え、22年間の人生の中でどのような被服を着装し、自己を呈示しているのかについて分析を行い、改めて「自分を知る」ことを本稿での主要目的として掲げている。

分析を行うにあたっては、写真データを客観的材料として使用し、その時々私がどのような被服を着装していたのかを明らかにすると共に、何を行い、誰と過ごし、どのような状況下にあったのかも含め、複合的に自己分析を行った。そして、私自身が記憶している、自分で被服を選択し始めた9歳を、初めて被服を通じて自我が発露した分岐点として仮説を立て、それ以前と以降とでの被服の変化に着目して分析を行った。その結果、9歳及び19歳を境に劇的変化があることが分かった。そのような劇的変化がなぜ起きたのかについて探る上で、G・H・Meadの自我論及びE・Goffmanのドラマトルギーを通じ、広がる社会生活を舞台に、「自分」が出現し、「演技者」として振る舞うようになった私という人間の社会化の一例を挙げる事が出来た。

## 目次

1. はじめに
2. 先行研究
  - 2-1 G.H.Mead—他者と自我形成—
  - 2-2 E.Goffman—ドラマ的視角から捉える自己—
    - 2-2-1 演じる「私」、演じられる「私」—役柄に対する「信」と「不信」—
    - 2-2-2 劇的具象化と印象操作
3. 研究方法
  - 3-1 「過去」の「私」の収集
  - 3-2 分析方法
4. 結果と分析
  - 4-1 「被服」と「私」—社会集団と重要な他者
    - (1)乳幼児期(0歳～3歳)
    - (2)幼稚園時代(4歳～6歳)
    - (3)小学校低学年(7歳～8歳)
    - (4)小学校中学年から高学年(9歳～12歳)
    - (5)中学時代(13歳～15歳)
    - (6)高校時代(16歳～18歳)
    - (7)大学時代(19歳～22歳)
  - 4-2 服装の推移
  - 4-3 被服の色の変化
  - 4-4 身体装飾の変化
  - 4-5 周囲との同調性
5. 考察
  - 5-1 乳幼児期から小学校低学年の「私」
  - 5-2 小学校3年生から6年生までの「私」
  - 5-3 中学校時代・高校時代の「私」
  - 5-4 大学時代の「私」
6. さいごに
7. 参考文献・引用文献

## 1. はじめに

私たちは、日々生活する中で大勢の人と出会う。学校や職場、電車、商店、街路などいたるところで見知らぬ他者とすれ違うだろう。その際に、人の目はその人の外見に向けられている。その人の性別、年齢、職業、性格などを知らず知らずのうちに外見から情報を集め、おおよその人物像を得ているのである。例えば、電車に乗った際にその人の周辺だけなぜか席が空いているのに誰も座っていない、ということを見かけたことはないだろうか。彼は薄汚れた被服を身にまとい、髪も乱れていた。電車に乗ってきた人たちは、特に誰一人とも彼と会話もしたわけでもなく、どのような人物かも分からないのに、彼の周辺には座ろうとはしなかった。なぜそのような行動をとるのだろうか。それは、彼らが無意識のうちに自分に対して危険信号を発し、その人を避けてしまったからである。同じ電車に乗っていた人たちは、表情、態度、被服などの外面的要素を基に見ず知らずの彼に対して「危険人物」という印象を形成し、彼を避けたのである。そのようにして、私たちは電車の中や学校内、道端を歩いている際にも誰彼を互いに「みている」。そして相手に対して仮の人物像を形成しているのである。では反対を考えてみたところ、実際に生活する中で、自分自身が「みられている」と思い、生活しているだろうか。そこまで自意識過剰に生活すれば、精神的病にかかってしまうだろう。しかし、私たちは「みられている」と感じていなくても、「みられている」ことを考えながら行動しているのではないだろうか。それをまさに実行しているのが、「被服」ではないかと考える。例えば、大学内を見渡してみると、明らかに寝巻きのままの服装で登校したというような人はあまり見かけないだろう。また、前日と同じ服装で登校してはならないという規則・法律などは存在せず、着装する本人が気にならなければ同じ服装で登校しても良いのに、なぜか人は毎日違う服装を着装する。それは、自分の意志に従っているように感じながら、「他者」を意識した行動をとっているからである。それぞれが何かしら思惑（「憧れの芸能人のように可愛くみられたい」「清楚にみられたい」など）を抱きながら、尚且つ社会的生活を行う上で支障をきたさない、その人自身が「みられている」ことを意識した「被服」を着装していると思う。学校内に留まらず、いたる所で見かける人それぞれが「被服」を通し、「その人自身」を呈示しているのである。

まず、本稿を論じるにあたって「被服」の位置づけを明確にしておきたい。人が「被服」を着装する動機には、Flugel (1930) の指摘した、「装飾（身体を美化すること）」「慎み（身体美を隠し、他者の注意を引かないように自制すること）」「身体保護（皮膚を守り、体温

を調節すること)」という三つの側面や、Laver (1932) の指摘した「上下関係の原理 (自分が何者であるかを主張すること)」「魅惑の原理 (異性の目を引くため)」「実用の原理 (生活や仕事をよりやりやすくする、より快適にする)」といった身体的特徴の呈示、装飾としての要素を含んでいる(神山編 1996)。神山(1996)によれば、被服に関する人間の行動 (選択・使用・廃止、等の諸行動) には、三つの社会・心理的機能がみられる。一つ目が「自己の確認・強化・変容」機能、二つ目が他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、三つ目が他者との行為のやりとりを規定するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能があるとされている。その中でも「情報伝達」機能に関して、六つのメッセージが発していることを明らかにしている。神山(1996)によれば、一つ目が、「アイデンティティに関する情報」である。自己自身に関する情報の呈示を意味し、性別・年齢・職業・地位・人種・所属集団によって示される同一性など、自己の意味づけを行う情報である。二つ目が「人格に関する情報」である。派手な人、地味な人、女らしい人、男らしい人などの、服装によってイメージされる他者の内面に関する情報を示す。三つ目が「態度に関する情報」である。どのような被服をどう着るかで、社会に対して保守的か急進的かという、社会的態度に関する情報が認知される。四つ目が「感情や情動に関する情報」である。被服が示す、色彩や柄、デザイン、スタイルは爽快さ・くつろぎ・優越・充実・悲しみ・喜びなどのこのころの状態に関する情報を伝える側面がある。五つ目が「価値に関する情報」である。被服は、健康、若さ、性的魅力、遊び、地位、富、自然といった、多くの人が共通に到達ないし獲得したいと願っている望ましいもの (価値) に関する情報を呈示する。最後に六つ目が「状況的意味に関する情報」である。私たちは、フォーマルな場か、カジュアルな場か、その T.P.O に応じて服装を替えようとするように、被服はある社会的場面 (状況) がもつ意味に関する情報を含んでいる。以上のように「被服」は私たちと深く結びつきがあるものだということがわかる。そのように理解したところで、私は他者の「被服」における呈示内容は客観的に自分の判断基準を通して認識することができるが、反対に自分自身は周囲に対してどのような自己を呈示しているのかについて興味を持った。

本稿では見られる側である自分自身を敢えて焦点にあて、自分自身が多くの他者と関わり、社会化される中で私自身の「被服」における自己呈示を探りたいと思った。そのためには、まず初めに「被服」を着装する自分自身を分析する上での理論枠組みを検討していく。そして 0 歳から 22 歳までの自分は、どのような準拠集団に所属し、社会環境に自分の身を投じていたのかなどについても写真データを基に記憶を辿りながら確認していく。「被

服」を媒体としてどのように「自分」を呈示していたのかを振り返り、新たな「自分」を知ることが本稿の目的としたいと考える。本稿を論じることで、一人の人間の社会の広がり方や他者との関わりによる変化が被服を通してみることができ、社会化の過程の検証例として参照できると考える。

## 2. 先行研究

自分自身を研究対象と置く上で、被服における私の軌跡を語るだけでは社会学にはならない。過去の自分を振り返る際の客観的視点を得るために、自己や自己呈示に関する理論について考察していきたい。

### 2-1 G.H.Mead—他者と自我形成

個人が「被服」を着装する—その際に人は何を考えて、選択をしているのだろうか。「この洋服は私に似合うだろうか」「これを着ればいつもとは違う私に見えるだろうか」—こんな風に思い巡らせて、個人は「被服」を着装しているのではないだろうか。私たちは、日々生活をする中で自分自身の姿や行為を他者の目から捉えようとする。では、そのように自分自身を客観的視点から捉えられるのはなぜだろうか。船津衛は、人間が他者の視点から自分を得る—つまり「自我形成」について以下のように述べている。

人間の自我とは他の人間とのかかわりにおいて形づくられる。自我は他者とのコミュニケーションをつうじて生み出される。人間の自我は孤立したものではなく、常に他の人間との関係において社会的に形成されるものである。人間は自分のことを自分だけではわからず、自分がどのようなものであるかを他のひとを通して知るようになる(船津1995:45-46)。

船津(1995)によれば、自分を知る上で他者の存在が非常に大きいことがいえよう。そのように、他者と関わることで、自分を他者の視点から客観視し、反省し、変容していくことができるのは、人間のみが営める行為である。相手にどのようにみられ、どのようにみられたいか—「被服」を着装する行為は、他者の視点から捉えた自分を呈示するという、他者及び社会に対して反応する行為でもあり、自分自身に対しても発見をする行為でもあると思う。この論文において、「自分」を客観的に捉える視点を得る上で G.H. Mead (1934=1973) の自我論を重要な枠組みの一つとして採用したい。

Mead (1934=1973) は、人間の自我が誕生したとたんですでにあるものではなく、社会的経験や社会的活動の過程において他者とのかかわりから生み出されてくるという、自我の社会説を主張した。Mead (1934=1973) によれば、自我はそれ自体として自然発生するものではなく、それは他者の態度、期待、パースペクティブとの関連において生み出されてくるという。人間の自我というのは他者の態度、期待、パースペクティブを自らのうちに取り入れること、つまり「他者の役割取得」を通じて具体的に形づくられるという。子ども時代に「ごっこあそび」を通じて、身近な他者の役割を学び、そこから自分を見つめるようになり、他者と自分の違いを知ることで自我を形成していく。そして、より成長してからは所属する社会集団全体の態度を組織化・一般化させることで自我が形成されるとしている。また、Mead (1934=1973) によれば、人間の自我には他者の役割や期待をそのまま受け入れた「客我 (me)」といわれる社会的側面と、その「客我 (me)」に対する反応である「主我 (I)」の2つの側面から成り立っているという。

「主我 (I)」は自我の積極的側面を表し、人間の個性や独自性、また創造性や主体性を示し、新しさを創発するものであるとされる。「主我 (I)」は、人間の経験のうちで最も魅力的な部分である。何か新しいものが生み出されるのは、この「主我 (I)」によってであり、そこに人間のいちばん重要な価値がおかれ、人間を他の動物と区別させるのは、この「主我 (I)」による自我の形成である(井上・船津 2005)。これを例えば、記憶に準えて考えてみると、私たちは自分に話しかけられたことや自分が話したことや、その際の感情を記憶している。この瞬間の「主我 (I)」は次の瞬間の「客我 (me)」の中に現存している。つまりその瞬間「主我 (I)」だった「私」が次の瞬間には「客我 (me)」として新たな「主我 (I)」によって振り返られる対象となるのである。そのようにして人は自己を反省し変容していく。

日々生活する中で自分自身の行為に影響していると人が想定している他者の態度が「客我 (me)」を構成し、それを「主我 (I)」が反応することにより自分に何らかの変化をもたらす。この視点は、「被服」における変化を捉える上で重要な視点になるのではないだろうか。「昨日の私」が「今日の私」と違う装いをする。「他者の役割取得」で獲得した「客我 (me)」を「主我 (I)」が捉えることで、「ふさわしい自己像」が形成され、私の装いに変化が起きるのではないだろうか。「被服」における自己呈示を捉える上で、Mead (1934=1973) の自我論は着装者がなぜそのように自己を変容させていくのか、その基準点となる自我を理解する視点を与えてくれる。

## 2-2 E.Goffman—ドラマ的視角から捉える自己—

「被服」から自己を探る上で、Mead(1934=1973)の自我論は着装者である「私」自身の変容を捉える枠組みとして位置付け、E. Goffman (1959) が提唱した「ドラマトゥルギー」を、自己呈示それ自体を捉えるもう一つの分析枠組みとして検討していきたい。

Goffman (1959) は私たちが日常生活を送る上での様々な行為を劇場での演技に見立てて、演出上の技法に焦点を当てて分析をした。Goffman (1959) によると、私たちは人生という舞台の中で何かしらの役柄を演じている。成長していく過程で、様々な行為場面にふさわしい一種の仮面（役柄）を学びとり、それによって社会的場面に適応し、自己の欲求を充足するようになる。Goffman (1959) の「ドラマトゥルギー」では、そのように役柄を学び、社会的場面に適応する際に他者を意識して行為する（印象を操作する）個人を「パフォーマー」、その行為を目撃する他者を「オーディエンス」として捉えた。そして観客の前で印象を維持するために、演出上の協力関係をもつ集団を「パフォーマンス・チーム」して捉え、その場にある背景や小道具となっている家具や装飾品、物理的配置、その他の背景になる品々をみな、「舞台装置」であると捉えた。状況に応じ、「私」を演じる。「被服」においても同様のことがいえるだろう。日常生活において「パフォーマー」である個人が自らを呈示する、つまりは印象を操作する上での主体的側面及び客体的側面を、被服における自己呈示の演劇的枠組みとして以下でふれていきたいと思う。

### 2-2-1 演じる「私」、演じられる「私」—役柄に対する「信」と「不信」—

Goffman (1959) によると、パフォーマーとしての個人は、自分の役柄に対して、完全に醒めている場合と完全に欺かれている場合がある。例えば、ある人が占い師をしているとする。完全に自分の役柄に対して醒めている場合は、占いを頼りに来た客に対して、自分には未来を見据える力が無いと理解しながらも、占い師としての役柄を「演じている」のである。一方で完全に自分の役柄に欺かれている場合は、無意識に思いついた事柄に対して自分は未来を見据える力があると思い、自分の占い師としての能力によるものだと信じ込む。そして「占い師」としての言葉を何の詐欺的感情もなく客に伝えるのである。上記の例は極端な例であるが、このように自分の役柄に信を置くか、偽りであると認識しながら演じるかどうかというのは、個人に固有の安全策と防衛手段を与えるのである。

当初はある役柄に対して、醒めた態度で接し、自分の中に距離を持って演じていたが、しだいにその距離が無くなり、ある役柄を「役柄」とは捉えず、「自分自身そのものである」と考え始める。その反対の流れも同様に存在する。これが、自分の役柄に対する不信と信頼のサイクルである。「自分は〇〇な人間だ」いや、「自分は実は〇〇な人間ではない気がする…」というように錯綜するのである。それは自分自身の行動や他者からの指摘など様々な要因により繰り返される。自分自身に対する不信と信頼の錯綜は、個人が身に纏う「被服」においても表れているのではないだろうか。例えば、いつも自分が着装している被服とは雰囲気異なるジャンルの被服を着装するとしよう。初めは自分に似合っていると感じているが、家族・友人等の反応を受け、その被服を着装する自分が偽りの自分に感じ始め、最終的にはその被服を着装することを止めてしまう。今の自分をふさわしい「自己像」だと信じ込んでいるか、醒めた態度で距離をとって試しているかは、「被服」における変化を考慮する上で興味深いと考える。

## 2-2-2 劇的具象化と印象操作

Goffman (1959) によると、パフォーマーとしての個人は、それを目撃するオーディエンスに対して眼前につくりだされた印象をありのまま受け入れることを要請する。しかし一方で、パフォーマー自身も自分の「役柄」を演じきることが第一としての目的であり、責任として負っているのである。例えば、学校の教室内で教師と生徒がいるとしよう。もし急に教師が授業を放棄して、酒を飲み出したらどうだろうか。生徒達は教師が「教師」らしからぬ行為をすることにより、困惑し、衝撃を受け、教師に対する不信感を抱くだろう。このような混乱を招かないために、パフォーマーがオーディエンスに対して自分の「役柄」を演じきることが対面的相互行為を潤滑に行うためのパフォーマーの責任である。これを Goffman (1959) は「劇的具象化」といい、個人は他者を前にした時に、自分のもつ諸能力や地位を劇的に呈示しなければならない演劇的側面をもつことを述べている。そしてある場面においてふさわしい「役柄」を演じるということは、他の場面においては異なる「役柄」を演じているということも認識しておかなければならない。娘としての「私」、アルバイトとして働いている時の「私」、大学で講義を受講している時の「私」—場面に応じて、その状況にふさわしい「私」を演じ、劇的具象化を行うことを他者に対して「印象操作」をしているという。「印象操作」にはパフォーマーが役柄を劇的具象化するという意味合いだけではな

い。オーディエンスに悪い印象を与えないように未然に防護的手段を講じ、他者の是認や信頼を勝ち取り、それを通じて自己の目標達成を図ることもいう。「印象操作」について、桐田（1988）は、「他者保護と自己防衛とを合わせもち、個人的な戦略であるとともに集合的な協調でもある」と述べている（桐田 1988:53）。

Goffman（1959）は以下のように述べている。

個人は徹底的に計算された行為をし、彼が得たいと考えている特定の反応を呼び起こす可能性の高い印象を与えるためにのみ、ある特定の 방법으로彼自身を表出することがある。個人は活動中に計算するのであろうが、自分がそのようにしていることに気づいていないことがある。そして彼は特定の 방법으로意図的かつ意識的に彼自身を表出することがあるが、それは主として、彼の所属する集団、あるいは彼の社会的地位の伝統がこの種の表現を要求しているからであって、彼の表出が印象を与えた人々におそらく呼び起こされるなんらかの特定の反応を求めているからではないのである。個人は役割の伝統によってある種のうまく設計された印象を与えることができるのであって、その当人にはこのような印象を抱かせようという気は、意識的にも無意識的にも全くもっていないのである（Goffman 1959:17）。

Goffman（1959）は私たちが独立した個体であるようにみえて、集団、地位、場所、他者などそれらが織り成す「状況」により産出されると考えた。被服では、一見私たちは自らが「○○のようにみられたい」という願望を中心として選択しているように考える。しかし、その選択は他者が困惑しない許容範囲、すなわち自分の所属する社会集団や社会的地位が尺度となっていて行われているのではないだろうか。Goffman（1959）のこの理論を受けて、「印象操作」をする私個人と集団との関わり合いや、社会的地位などの「状況」を分析することが自己を分析する上で重要な視点になると思う。

### 3. 研究方法

#### 3-1 「過去」の「私」の収集

私は22年間においてどのように「自分」を呈示しているのかについて探るため、「自分」を知る客観的材料として、写真データを分析対象としたいと思う。写真データは、私の人

生における場面を切り取った資料である。その時の私は何をしていた、どのような状況下にいるのかについて伝達している。この分析をするにあたって、写真データ（写真の中の「私」）はパフォーマーであると考えられる。その時々の状況下における「私」という人間の印象を呈示している。それを分析過程における現在の「私」はオーディエンスとして客観的に捉えることができるだろう。

写真データは0歳から22歳までのものを対象とする。写真を収集するにあたって、着装する被服が明確に認識できるかどうかを基準に、写真選別を行った。同じ日に、同じ状況で、同じ人物に囲まれているであろう写真データも状況や社会関係を分析する上で多角的視点を得られるのではないかと考え、全て採用した。

### 3-2 分析方法

集められた写真データは、年齢別、学齢区分別に分類し、被服はもちろんのこと、場所や状況、周囲の人物及び周囲との同調性等、写真データからくみ取れる情報を書き出し、カテゴリー化を行い、呈示においてどのような変容が起きているのかを探った。その中でも、どのような状況で、どのような呈示を行っているのかを分析するため。写真データの中に写る周囲の人物及び写真が撮影された状況(着装状況)、年齢別の服装の推移、被服に取り入れられている色の推移、身体装飾物の推移、周囲との同調性に焦点をあて、分析を行った。以下ではその結果を自分自身の記憶も一つの事実として織り交ぜ、被服においてどのような自己呈示が行われていたのかについて明らかにする。

## 4. 結果と分析

写真による自己呈示の分析を行う前に明らかにしておきたいことがある。それは被服に対する私の自己意思がいつ芽生えたかについてである。それを明らかにすることで Goffman (1959) のいう「印象操作」の観点から分析が可能になるであろう。

記憶を辿ると、私が被服に対して自己意思を示したのは9歳(小3)であると認識している。母親が購入してきた衣服を自分で選択し、学校に登校していたことから、この時期が私の自我の芽生えではないだろうか。以下で分析するにあたって9歳(小3)の前後における変化も着目していきたい。

### 4-1. 「被服」と「私」－社会集団と重要な他者

「被服」における自己呈示を探る上で、Mead (1934=1973) がいう「客我 (me)」に影

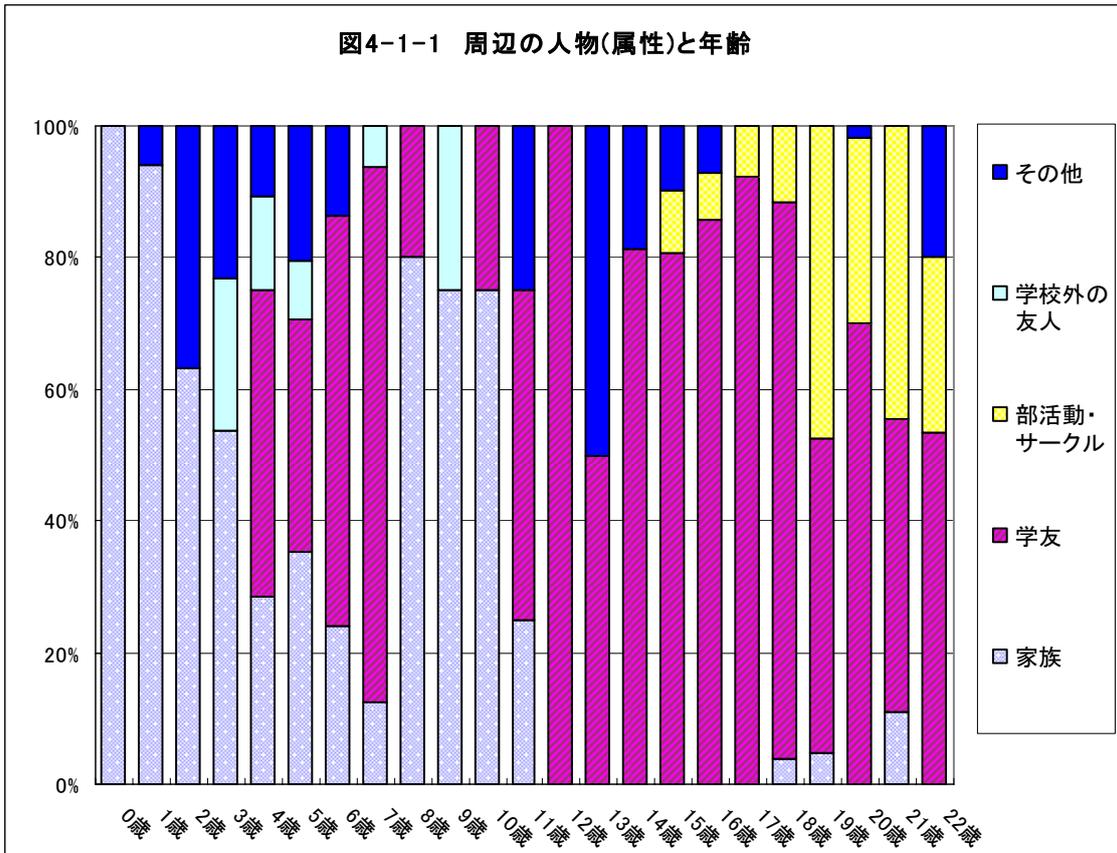
響を与えた他者及び、Goffman (1959) のいう「パフォーマー」の演目を定める他者を明らかにしなければならない。以下では客観的材料として写真データから0歳から22歳までの「私」の周囲の人物、写真の撮影された状況を明らかにし、影響を与えたであろう社会集団と重要な他者を、記憶を辿りながら明示していきたいと考える。

表4 周囲の人物と属性(0歳～22歳)

		周囲の人物の属性 (%)				
学齢区分	年齢(学年)	家族	友人			その他
			学友	部活動・サークル	学校外の友人	
乳幼児期	0歳	20(100)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	1歳	16(94.1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(5.5)
	2歳	19(63.3)	0(0)	0(0)	0(0)	11(36.7)
	3歳	14(53.8)	0(0)	0(0)	6(37.5)	6(37.5)
幼稚園	4歳(年少)	8(28.6)	13(46.4)	0(0)	4(14.3)	3(10.7)
	5歳(年中)	12(35.3)	12(35.3)	0(0)	3(8.8)	7(20.6)
	6歳(年長)	7(24.1)	18(62.1)	0(0)	0(0)	4(13.8)
小学校	7歳(小1)	2(12.5)	13(81.3)	0(0)	1(6.3)	0(0)
	8歳(小2)	4(80)	1(20)	0(0)	0(0)	0(0)
	9歳(小3)	3(75)	0(0)	0(0)	1(25)	0(0)
	10歳(小4)	3(75)	1(25)	0(0)	0(0)	0(0)
	11歳(小5)	1(25)	2(50)	0(0)	0(0)	1(25)
	12歳(小6)	0(0)	4(100)	0(0)	0(0)	0(0)
中学校	13歳(中1)	0(0)	1(50)	0(0)	0(0)	1(50)
	14歳(中2)	0(0)	13(81.3)	0(0)	0(0)	3(18.8)
	15歳(中3)	0(0)	25(80.6)	3(9.7)	0(0)	3(9.7)
高校	16歳(高1)	0(0)	12(85.7)	1(7.1)	0(0)	1(7.1)
	17歳(高2)	0(0)	36(92.3)	3(7.7)	0(0)	0(0)
	18歳(高3)	1(3.8)	22(84.6)	3(11.5)	0(0)	0(0)
大学	19歳(大1)	1(4.8)	10(47.6)	10(47.6)	0(0)	0(0)
	20歳(大2)	0(0)	42(70)	17(28.3)	0(0)	1(1.7)
	21歳(大3)	1(11.1)	4(44.4)	4(44.4)	0(0)	0(0)
	22歳(大4)	0(0)	8(53.3)	4(26.7)	0(0)	3(20)

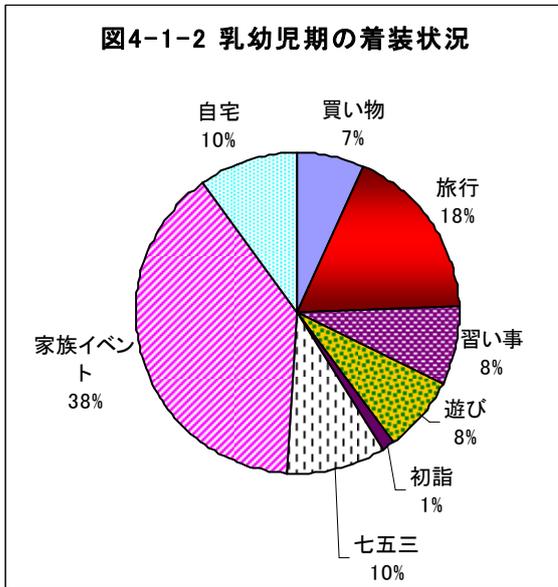
注)「学校外の友人」は、所属する学校機関外の友人であり、例えば「高校時の友人」も大学時では「学校外の友人」として総計している。

図4-1-1 周辺の人物(属性)と年齢



(1)乳幼児期 (0歳～3歳)

図4-1-2 乳幼児期の着装状況



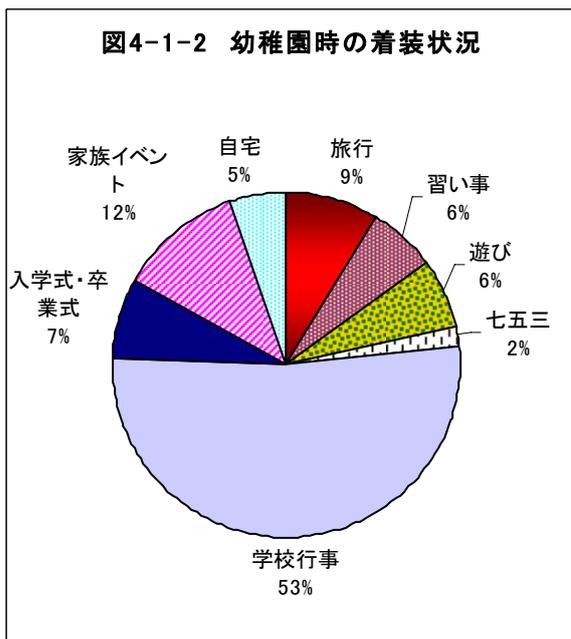
写真データからはその当時の「私」の生活において、どのような他者が中心となっていたのかについて分かった。まず乳幼児期(0歳～3歳)は、図4-1-1を見ても分かる通り、周辺の人物に「家族」が5割以上占め、圧倒的に多い。着装状況には、図4-1-2によると「家族イベント」の項目が3割を占めている。「家族イベント」とは、兄や姉の通う幼稚園の行事や習い事の発表会に随伴した状況や、家族で祖父母の家に集まった状況等を指す。「家族

イベント」の他には「自宅」、「買い物」、「旅行」、「遊び」、「初詣」、「七五三」が挙げられるが、これらの状況においても必ず母親、もしくは家族が随伴している。状況の変化としては、3歳を期に習い事のお歌教室や幼稚園入園前の幼児教室に通うようになり、同

年代の友人と接する機会が増え、写真にも同年代の友人が見られる。

### (2) 幼稚園時代（4歳～6歳）

幼稚園に入園してからは、図4-1-2より着装状況に「学校行事」が5割を占めていることが分かる。この時期の周囲の人物は、幼稚園の友人が3割強から6割にまで増加する。共に運動会や遠足に参加している写真が多く見受けられ、友人のお誕生日会に参加している

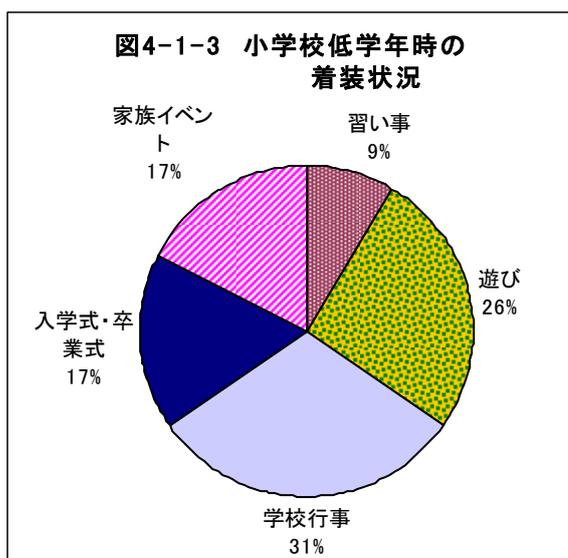


写真があり、人間関係に広がりが見られる。友人のお誕生日会や一緒に遊びに行っている状況にも母親が同伴して参加している写真があり、幼稚園時代は人間関係を結ぶ際に母親の介入があったことが分かる。

また、4歳の時に引越しをしたことで近所の同年代の友人が出来、学校外の友人が出来る。写真には一緒に雪遊びをしている写真があり、5歳の頃には近所の方々とバーベキューパーティーやキャンプに行くなど、家族以外の大人や子供との関わりが広がったことが伺える。また、習い事でピアノ

を習うようになり、ピアノの発表会に参加するといった状況の変化もあった。

### (3) 小学校低学年時代（7歳～8歳）



小学校に入学してからは、引き続き運動会や遠足、お祭等の「学校行事」で撮影された写真が多くあり、新たに「遊び」も増加する。私のお誕生日会を開いた時に撮影されたものなどがあり、同級生との積極的な関わりが増え、過ごす時間も増加する。家族で祖父母の家に訪れることも頻繁にあった。この時期も習い事のピアノを引き続き行っており、ピアノの発表会に参加する写真もあった。

#### (4) 小学校中学年～高学年時代（9歳～12歳）

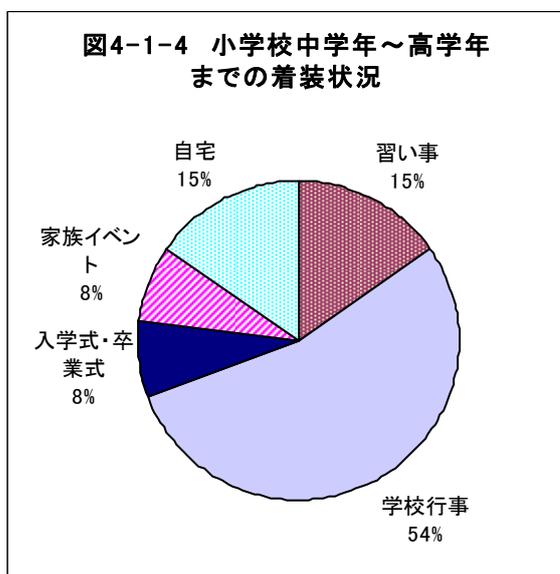
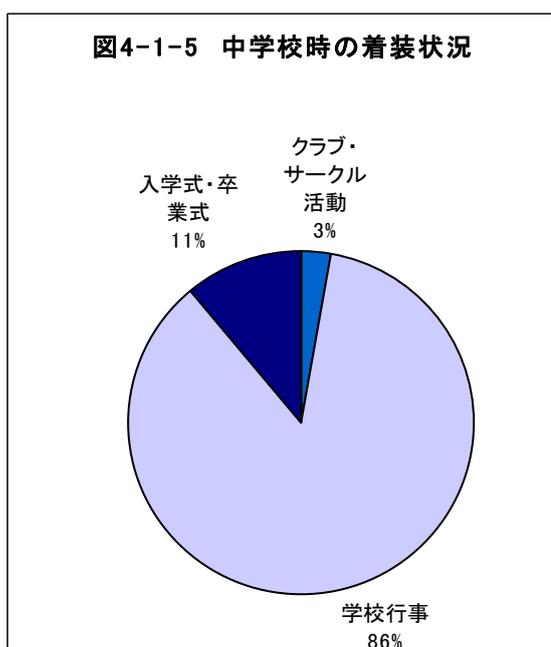


図 4-1-4 からは、小学校中学年以降も「学校行事」が 5 割を占めていることが分かる。この時期に習い事はピアノを辞め、絵画教室や習字教室に通うようになる。そのため、習い事での友人が増加した。そのような周囲の人物でいえば、10 歳(小 4)までは「家族」が他の項目よりも過半数を占めていた。小学校 5 年生までは年に 1、2 回家族旅行に行く機会があり、写真からも家族との密接に関わりがあったことが分かる。しかし、反抗期や思春

期になる小学校 6 年生頃から周囲の人物に家族が減少する。「家族イベント」も低学年の頃に比べ、半減しており、この頃の私にとっての重要な社会集団が家族から学校の友人といった同属集団へとベクトルが移転しているのだろう。小学校 5 年生頃から学校の友人とだけで買い物等に遊びに行くようになり、行動範囲が広がり始めたのはこの時期である。

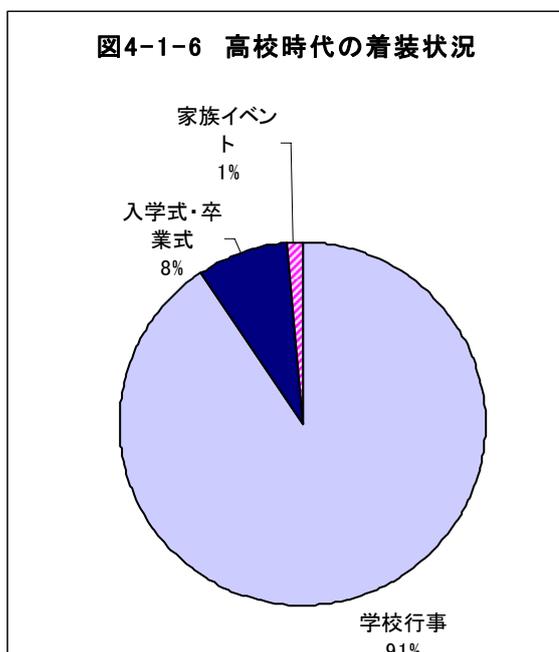
#### (5) 中学校時代（13歳～15歳）



中学校に入ってから、小学校時代とは異なり、「学校行事」が 8 割以上を占める。状況の変化としては、中学校に入学してから部活動を始め、同級生以外に部活動の同期や先輩、後輩等に関わる機会が増え、学校の友人を含め、部活動の仲間が私にとっての重要他者であった。そのことが図 4-1-1 の周囲の人物での学校の友人の増加傾向からも確認できる。中学校時代は、友人と衣服や装飾類を買いに行くようになり、被服に関して友人の意見を取り入れていた時期である。また、母親の意見よりも

友人の意見を重視して取り入れていた。

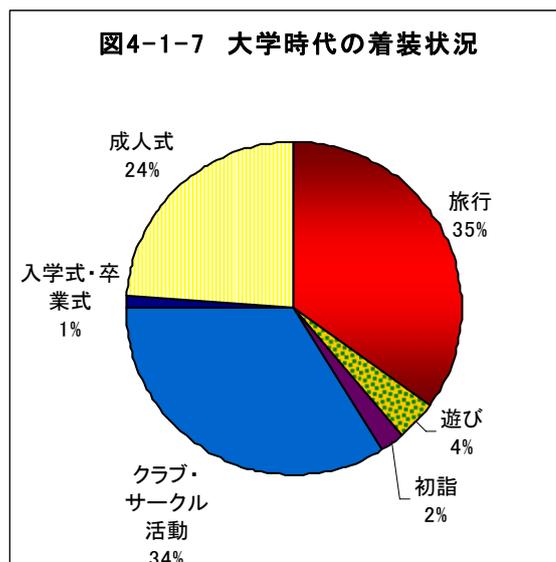
## (6) 高校時代 (16 歳～18 歳)



高校時は、着装状況に「学校行事」が9割を占め、周囲の人物は図 4-1-1 によると、17 歳(高 2)までは同級生もしくは部活動の先輩・後輩らが中心に写っている。その時期は学校の友人が私の中で重要な他者として位置付けられていたといえるだろう。また私の場合、高校生活 3 年間でクラス替えが行われず、同じ友人と過ごす時間が長く、被服においても彼女らの影響を非常に受けていたと思う。

## (7) 大学時代 (19 歳～22 歳)

大学に入学してからは、学校の友人との社会関係は結ばれているが、今までの学校生活とは異なり、教室があって毎日同じ友人に会うという機会が減少した。そのため、練習や強化合宿等で共に過ごす時間が多いサークル員が、図 4-1-1 での増加具合からも重要な他者として加わったということが考えられる。また、家族とも再び行動を行うようになったことが周囲の人物の結果から伺える。



状況の変化としては、学校の友人だけで旅行に行く機会が増え、行動範囲がさらに拡大したことである。また、大学時代は高校や中学校の友人らとも交流が継続しており、「遊び」や「旅行」に行った際に撮影された写真もあった。

写真データの周囲の人物や着装状況からは、家族、習い事の友人、学校の友人、部活動の仲間、サークル員といった形で社会的接触が拡大し、準拠集団が広がり、加わり、変転していることを汲み取ることが出来た。その当時に装着していた被服は少なからずそれらの影響を受けているだろう。それを確かめるために、次節では実際に年齢別にどのような服装を装着していたのかについてみていきたいと思う。

## 4-2. 服装の推移

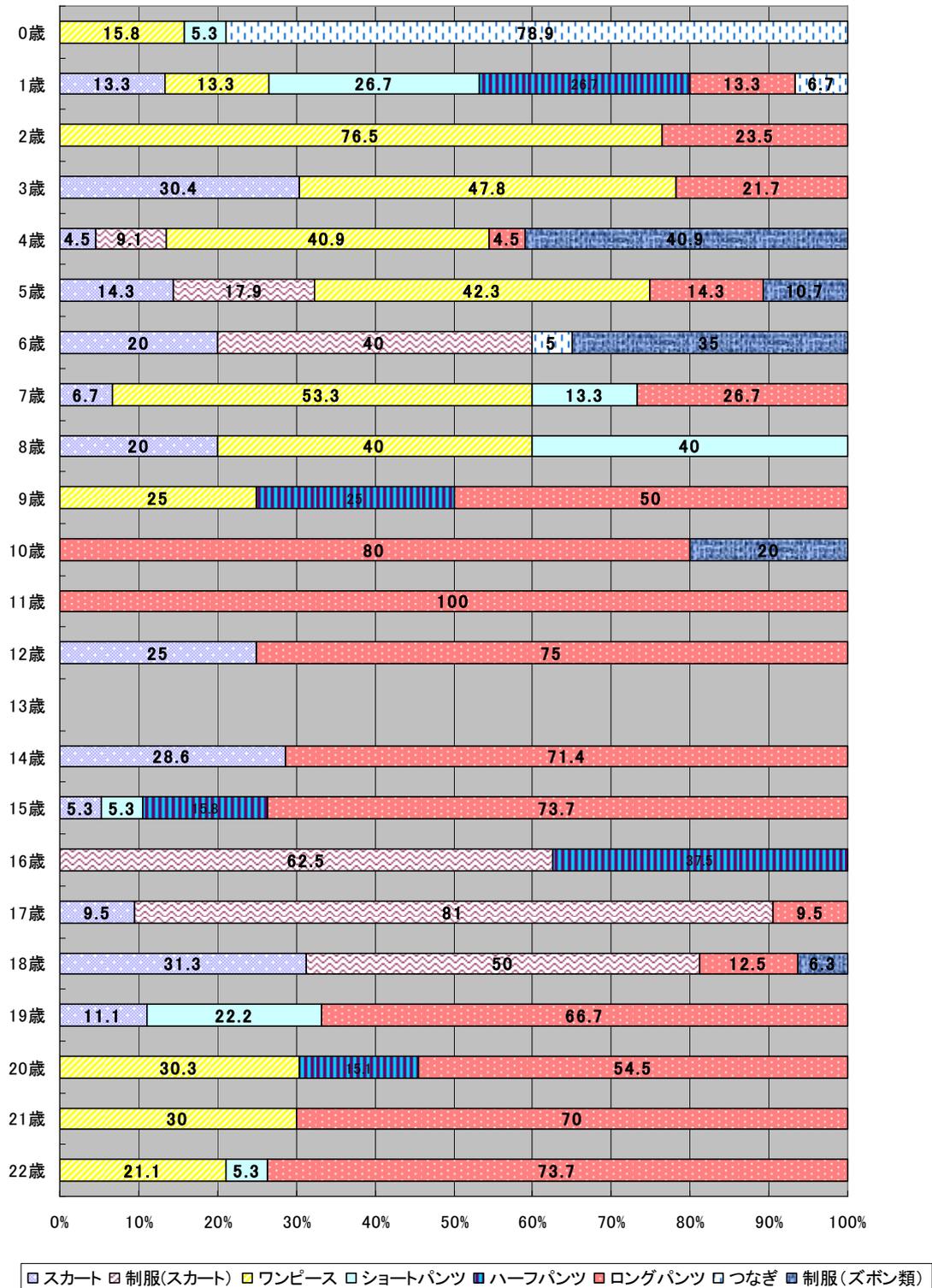
流動的な社会的状況で自己を投企する中で、外面に現される自己はどのように推移していくのだろうか。それについて私の0歳から22歳までにおける服装の推移を明らかにしていきたい。服装については、主に性的役割が認識されやすい、スカート類とズボン類に分類し、写真データを基に項目を「スカート」、「制服（スカート）」、「ワンピース」、「ショートパンツ」、「ハーフパンツ」、「ロングパンツ」、「つなぎ」、「制服（ズボン類）」に分類し、各年齢における総数と割合を以下で図表化した。表については、各年齢で最も着回数が高かった服装に色付けをし、どのような服装を最も嗜好していたのかを明確にしている。

表 4-2-1 服装と年齢(0歳～22歳)

		スカート類 (%)			ズボン類 (%)				
学齢区分	年齢(学年)	スカート	制服(スカート)	ワンピース	ショートパンツ	ハーフパンツ	ロングパンツ	つなぎ	制服(ズボン類)
乳幼児期	0歳	0(0)	0(0)	3(15.8)	1(5.3)	0(0)	0(0)	15(78.9)	0(0)
	1歳	2(13.3)	0(0)	2(13.3)	4(26.7)	4(26.7)	2(13.3)	1(6.7)	0(0)
	2歳	0(0)	0(0)	13(76.5)	0(0)	0(0)	4(23.5)	0(0)	0(0)
	3歳	7(30.4)	0(0)	11(47.8)	0(0)	0(0)	5(21.7)	0(0)	0(0)
幼稚園	4歳(年少)	1(4.5)	2(9.1)	9(40.9)	0(0)	0(0)	1(4.5)	0(0)	9(40.9)
	5歳(年中)	4(14.3)	5(17.9)	12(42.3)	0(0)	0(0)	4(14.3)	0(0)	3(10.7)
	6歳(年長)	4(20)	8(40)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(5)	7(35)
小学校	7歳(小1)	1(6.7)	0(0)	8(53.3)	2(13.3)	0(0)	4(26.7)	0(0)	0(0)
	8歳(小2)	1(20)	0(0)	2(40)	2(40)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	9歳(小3)	0(0)	0(0)	1(25)	0(0)	1(25)	2(50)	0(0)	0(0)
	10歳(小4)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(80)	0(0)	1(20)
	11歳(小5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(100)	0(0)	0(0)
	12歳(小6)	1(25)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(75)	0(0)	0(0)
中学校	13歳(中1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	14歳(中2)	2(28.6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(71.4)	0(0)	0(0)
	15歳(中3)	1(5.3)	0(0)	0(0)	1(5.3)	3(15.8)	14(73.7)	0(0)	0(0)
高校	16歳(高1)	0(0)	5(62.5)	0(0)	0(0)	3(37.5)	0(0)	0(0)	0(0)
	17歳(高2)	2(9.5)	17(81)	0(0)	0(0)	0(0)	2(9.5)	0(0)	0(0)
	18歳(高3)	5(31.3)	8(50)	0(0)	0(0)	0(0)	2(12.5)	0(0)	1(6.3)
大学	19歳(大1)	2(11.1)	0(0)	0(0)	4(22.2)	0(0)	12(66.7)	0(0)	0(0)
	20歳(大2)	0(0)	0(0)	10(30.3)	0(0)	5(15.1)	18(54.5)	0(0)	0(0)
	21歳(大3)	0(0)	0(0)	3(30)	0(0)	0(0)	7(70)	0(0)	0(0)
	22歳(大4)	0(0)	0(0)	4(21.1)	1(5.3)	0(0)	14(73.7)	0(0)	0(0)

※  は各年齢で最も着回数が高い被服。

図4-2-1 服装と年齢(0歳~22歳)《割合》



注)「13歳」は上半身の写真しか収集できなかったため、分析対象から外している。

年齢別に服装の推移をみていくと、ある年齢を分岐点として最も嗜好された服装に違いがあることがわかる。2歳から8歳(小2)までの期間においては、「ワンピース」が最も嗜好されており、次いで「スカート」「ロングパンツ」が多い。この時期は服装に関して偏りが小さく、多様な衣服を着装していたことがわかる。

それとは対極に、被服に対する自己意思の介入が生まれ出す9歳(小3)以降の服装に関しては、高校時代を除いて、全体的に「ロングパンツ」の着装割合が7割前後と最も高かった。次いで学校機関に強制される「制服スカート」を除けば、「ワンピース」が二番目に多い。個々の年齢においてみても、8歳(小2)までは「スカート類」が「ズボン類」よりも着装される割合が上回っていたが、9歳(小3)以降では、制服での「スカート」着装を除いて、「スカート類」が「ズボン類」を上回ることにはなかった。つまり9歳を分岐点としてそれ以降の年齢では、「スカート類」よりも「ズボン類」が重視して取り入れられるようになり、「服装の転換」が起きているということが分かる。特に小学校中学年の9歳から12歳までの期間において、12歳(小6)の卒業式で「スカート類」の着装した以外は「ロングパンツ」の着装が過半数を占め、「ロングパンツ」への偏重度合いが分かる。

しかし、その偏りは中学入学してからやや減少する。中学校に入学してから「スカート類」の着装割合が「ズボン類」に比較すると少量ではあるが増加している。小学校高学年時のように、卒業式等の特別行事の時以外の普段の服装として「スカート」を着装するようになったという変化がある。写真データの結果に中学校時において、「ショートパンツ」の着装がみられるが、これは所属していた部活のユニフォームとしての着装であり、私の自己意思が介入していないことを付言しておきたい。

次に高校に入学してからは制服着装義務により「制服(スカート)」の着装が一時的に上昇する。高校時に「ハーフパンツ」及び「スカート」の着装があるが、これもまた体育祭のクラスユニフォームとして着装したものであり、私の自己意思は介入していない。高校時は、私服を着装する機会が格段と減少し、制服中心の生活を送っていた。

次に、大学に入学してからの傾向をみると、20歳(大2)を期に「スカート類」の中でも「ワンピース」の着装回数が上昇傾向を示している。他にも大学入学前と同様に「ロングパンツ」の比重は高いが、「ハーフパンツ」「ショートパンツ」「スカート」などの着装もみられ、大学生になってからは以前と比べ、被服の多様化が起きているといえる。

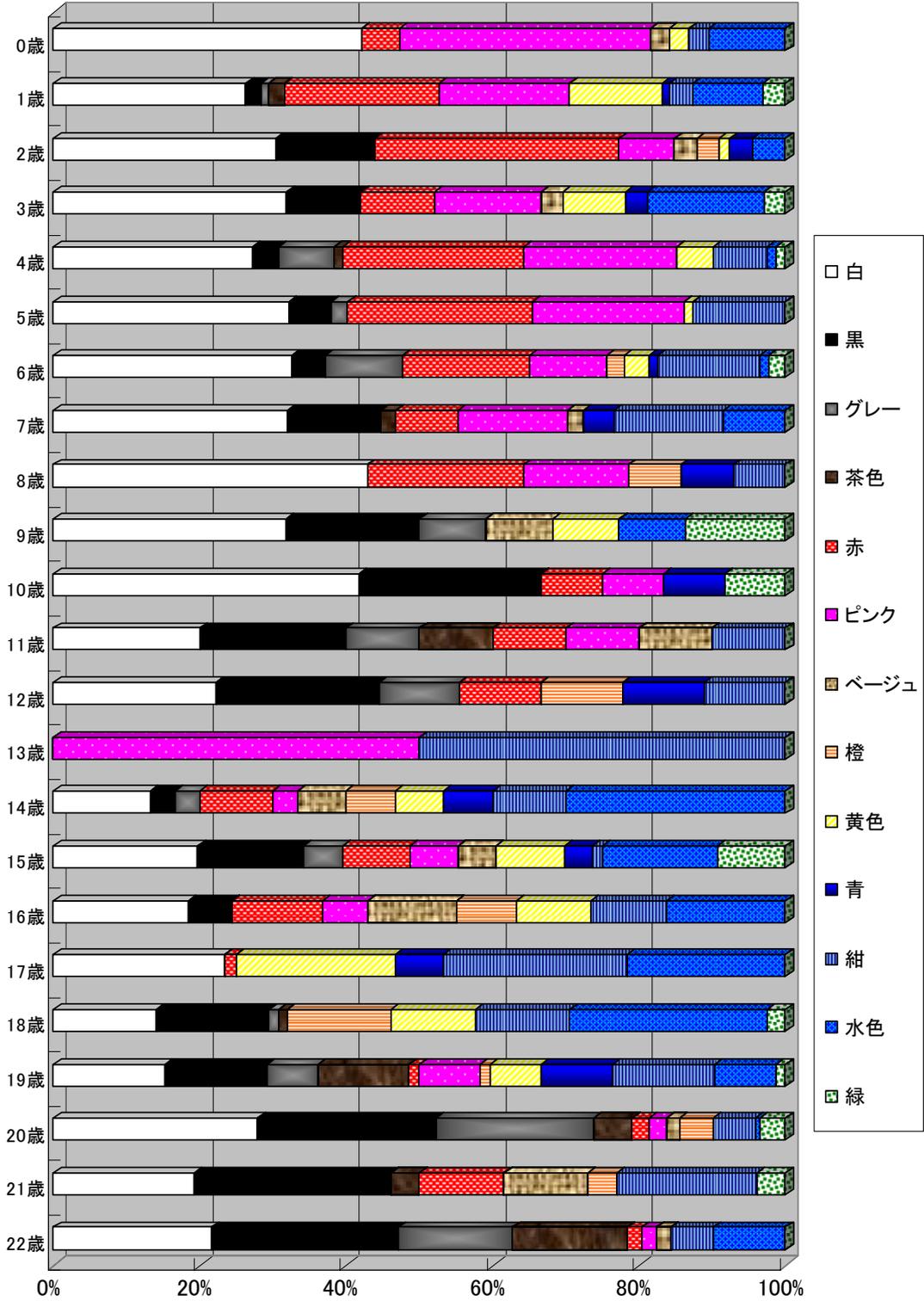
### 4-3. 被服の色の変化

次に「被服」に取り入れられている色と年齢における推移についてみていきたい。「被服」には装飾類全てを含めており、服装の柄の色等、細部にわたって総計している。写真データを収集している際に、年齢を重ねる毎に被服に取り入れられている色に変化があることが分かった。以下では各色と年齢とを照らし合わせ、その推移をみていく。

表 4-3-1 色と年齢(0歳～22歳)

		色 (%)												
学齢区分	年齢(学年)	白	黒	グレー	茶色	赤	ピンク	ベージュ	橙	黄色	青	紺	水色	緑
乳幼児期	0歳	16(42.1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(5.3)	13(34.2)	1(2.6)	0(0)	1(2.6)	0(0)	1(2.6)	4(10.5)	0(0)
	1歳	25(26.3)	2(2.1)	1(1.1)	2(2.1)	20(21.1)	17(17.9)	0(0)	0(0)	12(12.6)	1(1.1)	3(3.2)	9(9.5)	3(3.2)
	2歳	20(30.3)	9(13.6)	0(0)	0(0)	22(33.3)	5(7.6)	2(3)	2(3)	1(1.5)	2(3)	0(0)	3(4.5)	0(0)
	3歳	22(31.9)	7(10.1)	0(0)	0(0)	7(10.1)	10(14.5)	2(2.9)	0(0)	6(8.7)	2(2.9)	0(0)	11(15.9)	2(2.9)
幼稚園	4歳(年少)	22(27.2)	3(3.7)	6(7.4)	1(1.2)	20(24.7)	17(21)	0(0)	0(0)	4(4.9)	0(0)	6(7.4)	1(1.2)	1(1.2)
	5歳(年中)	28(32.2)	5(5.7)	2(2.3)	0(0)	22(25.3)	18(20.7)	0(0)	0(0)	1(1.1)	0(0)	11(12.6)	0(0)	0(0)
	6歳(年長)	28(32.6)	4(4.7)	9(10.5)	0(0)	15(17.4)	9(10.5)	0(0)	2(2.3)	3(3.5)	1(1.2)	12(14)	1(1.2)	2(2.3)
小学校	7歳(小1)	15(31.9)	6(12.8)	0(0)	1(2.1)	4(8.5)	7(14.9)	1(2.1)	0(0)	0(0)	2(4.3)	7(14.9)	4(8.5)	0(0)
	8歳(小2)	6(42.9)	0(0)	0(0)	0(0)	3(21.4)	2(14.3)	0(0)	1(7.1)	0(0)	1(7.1)	1(7.1)	0(0)	0(0)
	9歳(小3)	7(31.8)	4(18.2)	2(9.1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(9.1)	0(0)	2(9.1)	0(0)	0(0)	2(9.1)	3(13.6)
	10歳(小4)	5(41.7)	3(25)	0(0)	0(0)	1(8.3)	1(8.3)	0(0)	0(0)	0(0)	1(8.3)	0(0)	0(0)	1(8.3)
	11歳(小5)	2(20)	2(20)	1(10)	1(10)	1(10)	1(10)	1(10)	0(0)	0(0)	0(0)	1(10)	0(0)	0(0)
	12歳(小6)	2(22.2)	2(22.2)	1(11.1)	0(0)	1(11.1)	0(0)	0(0)	1(11.1)	0(0)	1(11.1)	1(11.1)	0(0)	0(0)
中学校	13歳(中1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(50)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(50)	0(0)	0(0)
	14歳(中2)	4(13.3)	1(3.3)	1(3.3)	0(0)	3(10)	1(3.3)	2(6.7)	2(6.7)	2(6.7)	2(6.7)	3(10)	9(30)	0(0)
	15歳(中3)	15(19.7)	11(14.5)	4(5.3)	0(0)	7(9.2)	5(6.6)	4(5.3)	0(0)	7(9.2)	3(3.9)	1(1.3)	12(15.8)	7(9.2)
高校	16歳(高1)	9(18.4)	3(6.1)	0(0)	0(0)	6(12.2)	3(6.1)	6(12.2)	4(8.2)	5(10.2)	0(0)	5(10.2)	8(16.3)	0(0)
	17歳(高2)	28(23.3)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1.7)	0(0)	0(0)	0(0)	26(21.7)	8(6.7)	30(25)	26(21.7)	0(0)
	18歳(高3)	11(14.1)	12(15.4)	1(1.3)	1(1.3)	0(0)	0(0)	0(0)	11(14.1)	9(11.5)	0(0)	10(12.8)	21(26.9)	2(2.6)
大学	19歳(大1)	11(15.3)	10(23.8)	5(6.9)	9(12.5)	1(1.4)	6(8.3)	0(0)	1(1.4)	5(6.9)	7(9.7)	10(23.8)	6(8.3)	1(1.4)
	20歳(大2)	48(27.9)	42(24.4)	37(21.5)	9(5.2)	4(2.3)	4(2.3)	3(1.7)	8(4.7)	0(0)	0(0)	10(5.8)	1(0.6)	6(3.5)
	21歳(大3)	5(19.2)	7(26.9)	0(0)	1(3.8)	3(11.5)	0(0)	3(11.5)	1(3.8)	0(0)	0(0)	5(19.2)	0(0)	1(3.8)
	22歳(大4)	11(21.6)	13(25.5)	8(15.7)	8(15.7)	1(2)	1(2)	1(2)	0(0)	0(0)	0(0)	3(5.9)	5(9.8)	0(0)

図4-3 被服の色と年齢〈割合〉



まず、色の推移について全体の特徴をみていく。「白」については、どの期間においても選択率が上位を占めている。0歳、8歳(小2)、10歳(小4)においては4割弱取り入れられている。その他の年齢においても、3割から1.5割前後という結果が出ており、図4-3を見ても分かる通り、比較的他の色に比べて積極的に取り入れられていたようだ。

次に「黒」についてみてみると年齢が上がるにつれて、選択率が上昇していることがわかる。8歳(小2)までの期間では、1割前後の選択率を占めていたが、9歳(小3)を過ぎてから1.5割から4割弱までの選択率を流動していることがわかる。同じ暗色系統の「グレー」に関しては、大学2年時と4年時の二つの時期に急激に上昇するという特徴がある。服装やパーティードレスのケープに取り入れられていた。「茶色」は年齢においては取り入れがみられない時期もあり、波がある。特に上昇を示しているのが、11歳(小5)と19歳(大1)及び22歳(大4)の時期に選択率が1割を超えている。ブーツやカバンに取り入れられていたためだろう。

次に「赤」に関しては、8歳(小2)までが頻繁に取り入れられており、各年齢における赤色の選択率が上位3位までを占めている。それ以降は被服への取り入れがみられない時期もあり、減少傾向を示しているといえる。「ピンク」は、「赤」と同様に0歳から8歳(小2)までの期間が選択率上位3位までを占めているが、9歳(小3)以降は全体に対して占める割合が減少傾向を示している。しかし、13歳(中1)に再び上昇するという特徴がある。それ以降は軒並み減少傾向を示す。

次に「ベージュ」については、9歳(小3)と11歳(小5)で1割、14歳と15歳で0.6割前後取り入れられている。それ以外の「橙」「黄色」は、高校時に最も選択率が上がる。「青」「紺」「水色」の寒色系統に関しては、それまで暖色や暗色ほど目立った取り入れはされていなかったが、中学校に入学してから上昇している。また高校時にも急激に上昇しているが、これは「制服」であるブレザー、スカート、シャツに取り入れられていた色であるため、上昇したと考えられる。「緑」については、乳幼児期から8歳(小2)までの期間は0.2割以下を示していたが、9歳(小3)から12歳(小6)の期間に0.7割まで上昇する。しかし、それ以降は緩やかな減少傾向を示している。

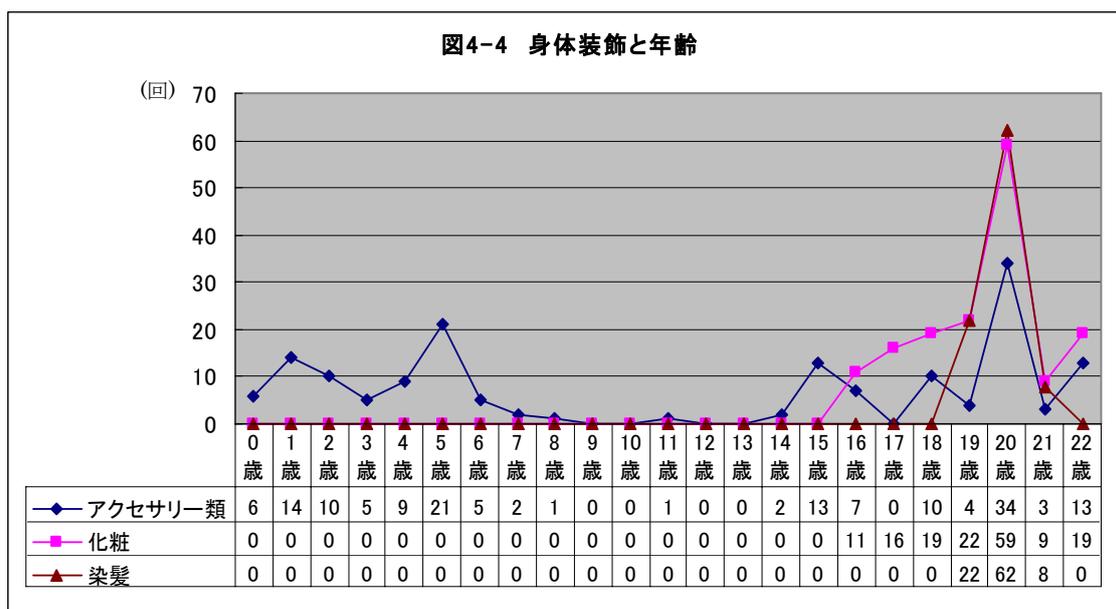
色の推移をみる中で、興味深いのが暖色と暗色の移り変わりである。乳幼児期から小学校低学年までは「赤」や「ピンク」等の暖色が優勢であったのに対して、小学校中学年頃から「黒」「グレー」「茶色」といった暗色系統が優勢となる。つまり被服への自己意思が介入する前と後では色の取り入れられ方が異なっているといえる。中学・高校時に一旦寒色系統が

優勢となるが、再び大学に入学してから暗色系統が頻繁に取り入れられている。「赤」や「ピンク」は乳幼児期から8歳(小2)までは服装に最も取り入れられていたが、9歳(小3)以降は靴や鞆などの装飾類に取り入れられていることが多くなった。中学校時が私服において「ピンク」を取り入れた物が着装された唯一の時期である。それ以降はサークルで作成されたTシャツに取り入れられている以外で「ピンク」の服装は着装しなくなったようだ。

まとめると、私の被服における色の推移は、大まかに「暖色(乳幼児期)⇒暗色(小3から小6)⇒暖色・寒色(中学)⇒寒色(高校)⇒暗色(大学)」という流れになっていることが分かった。年齢を重ねるうちに「好みが変わった」という単純な理由ではなく、それは私自身の社会集団や社会的地位を受容した上で表す、「自分の色」が移り変わったことが要因となっているのだろう。

#### 4-4 身体装飾の変化

以上までで服装及び色を分析してきたが、「私」という人間はどのように自己呈示されてきたのかについて探る際に、外見を織り成すもの全てにおいて分析することがより外部に表れる自分自身を理解する上で必要になると考える。そのため、ここでは衣服とは違った、身体装飾の年齢別推移についてみていきたいと思う。アクセサリーや化粧、染髪といった身体装飾はどのように推移していくのだろうか。今回の分析において、アクセサリーに関しては、指輪、ネックレス、ピアス、ブレスレット、腕時計、髪飾り、帽子を含み、総計している。



まずアクセサリ類についてみていきたい。図 4-4 をみてわかるように、年齢別に山型ができていくことがわかる。それを受け、0歳から8歳までアクセサリの第一次隆盛期とし、中学2年生から高校1年生が第二次隆盛期、そして高校3年生から大学4年生までが第三次隆盛期として考えてみたい。第一次隆盛期においては、髪飾り、ネックレス、腕時計、帽子が挙げられ、特に髪飾りが最も着られる回数が高い。リボンやレースでピンク色を基調とした髪留めや、カチューシャを中心に着られており、「女の子らしさ」を感じさせるアクセサリが頻繁に取り入れられていた。第二次隆盛期として、中学2年生から3年生も特に髪飾りが中心に着られていた。この時期は、「きのこ」や「キャラクター」のヘアピンを付けるようになった。第一次隆盛期とは異なり、自主的に上記のようなアクセサリを着用していたという違いを留意しておきたい。またこの時期からピアスの着用もみられる。高校1年時は、髪飾りとブレスレットが頻繁に着用されている。

次に第三次隆盛期は、高校3年時に体育祭のクラスユニフォームに合わせてネックレスやブレスレットの着用がみられ、上昇している。大学に入学してからは、指輪、ネックレス、ピアス、ブレスレット、腕時計の着用が頻繁に行われており、その他の時期とは異なり、時と場合を選ばずに着用がされるようになり、着用回数が増加したと考えられる。化粧行動に関しては、高校入学と共に上昇する。染髪は大学入学と共に上昇するが、21歳期に減少傾向にある。染髪が減少する代わりに、化粧やアクセサリ着用が上昇している。

アクセサリに関していうと、第一次隆盛期は被服の選択を行っていた母親の意思の基に着用されている。しかし、第二次隆盛期になると自主的に髪飾りを着用するようになっている。これは中学校・高校共に洒落であると感じた先輩や友人を模倣したことによる。他者の影響を受けた着用である。第三次隆盛期では高校3年時の着用に関しては体育祭のクラスユニフォームとしての一部であったが、大学に入ってから必要不可欠な物として着用されるようになったと思う。どこに出掛けるにも着用しないことに何か物足りなさや違和感をもつようになり、それが着用回数の上昇に繋がったと考えられる。以上を踏まえると、アクセサリへの認識が推移しているように思う。第一次では、他者からは性別の認証道具として、私自身にとっては玩具としての認識もしくは全くもって認識していない時期もあっただろう。第二次では仲間集団との結合性を象徴する物という認識、そして第三次では「自分自身」を象徴する道具としての認識に変わり、他者の目を意識して着用されるようになったと考える。化粧や染髪もそのような他者の目を意識した「印象操作」の道具になっていたのだろう。

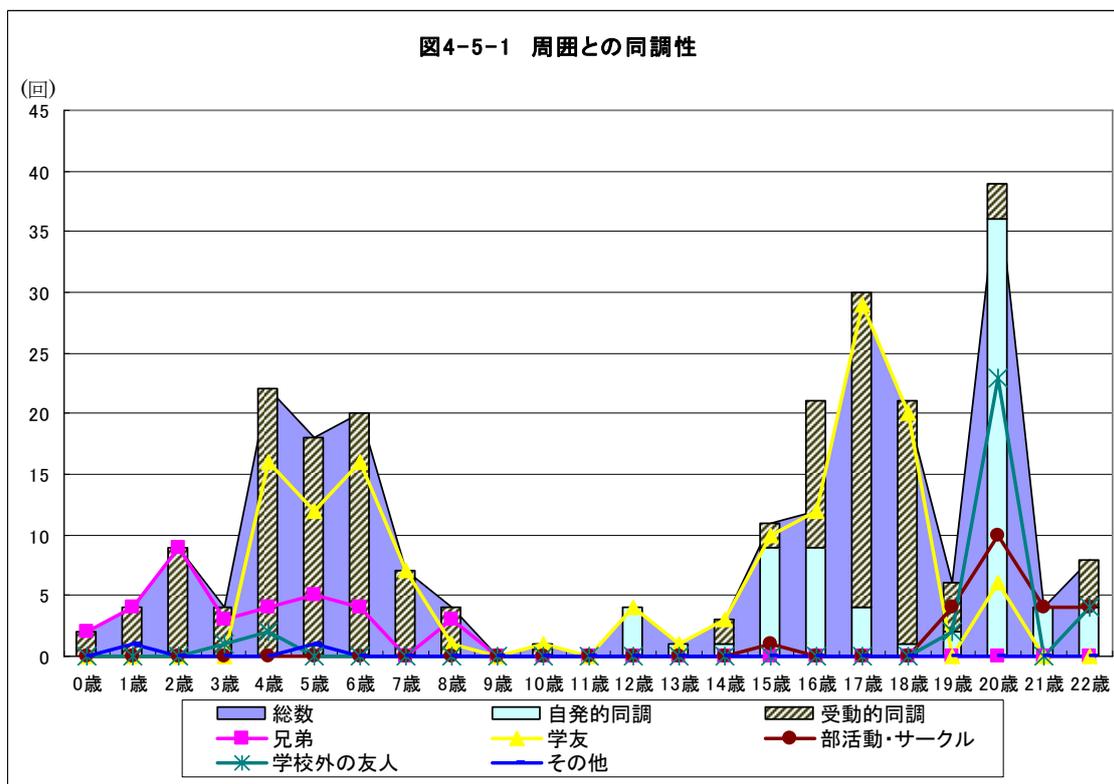
#### 4-5. 周囲との同調性について

この節では被服を物質的観点からではなく、周囲との関連を表す、被服の意味性についてみていきたい。写真データより、0歳から22歳までの「私」は被服に関して、周囲との同調性がみられることがわかった。それを受け、周囲とどれほど同調しているのか、そしてその同調は自発的に行われたものなのか、状況や他者によって強制された受動的な同調なのか、そして誰と同調しているのかについて分析していきたい。結果から自己呈示に表れる社会関係を捉え、他者との相互作用の観点から「自己」を分析していきたい。

表 4-5-1 周囲との同調性(0歳～22歳)

		周囲との同調性			同調性の対象				
学齢区分	年齢(学年)	総数	自発的同調	受動的な同調	兄弟	友人			その他
						学友	部活動・サークル	学校外の友人	
乳幼児期	0歳	2	0	2	2	0	0	0	0
	1歳	4	0	4	4	0	0	0	1
	2歳	9	0	9	9	0	0	0	0
	3歳	4	0	4	3	0	0	1	0
幼稚園	4歳(年少)	22	0	22	4	16	0	2	0
	5歳(年中)	18	0	18	5	12	0	0	1
	6歳(年長)	20	0	20	4	16	0	0	0
小学校	7歳(小1)	7	0	7	0	7	0	0	0
	8歳(小2)	4	0	4	3	1	0	0	0
	9歳(小3)	0	0	0	0	0	0	0	0
	10歳(小4)	1	0	1	0	1	0	0	0
	11歳(小5)	0	0	0	0	0	0	0	0
	12歳(小6)	4	4	0	0	4	0	0	0
中学校	13歳(中1)	1	1	0	0	1	0	0	0
	14歳(中2)	3	1	2	0	3	0	0	0
	15歳(中3)	11	9	2	0	10	1	0	0
高校	16歳(高1)	12	9	12	0	12	0	0	0
	17歳(高2)	29	4	26	0	29	0	0	0
	18歳(高3)	20	1	20	0	20	0	0	0
大学	19歳(大1)	6	2	4	0	0	4	2	0
	20歳(大2)	39	36	3	0	6	10	23	0
	21歳(大3)	4	4	0	0	0	4	0	0
	22歳(大4)	8	4	4	0	0	4	4	0

注)「学校外の友人」は、所属する学校機関外の友人であり、例えば「高校時の友人」も大学時では「学校外の友人」として総計している。



まず0歳から22歳までの「私」の周囲との同調性の推移についてみていく。特徴として、乳幼児期から幼稚園にかけて周囲との同調性が上昇していくが、それ以降の小学校・中学校においては四分の一以下まで落ち込み、そして再び高校、大学へと上昇していく。

乳幼児期から小学校2年生までの同調は、受動的同調のみである。幼稚園に入学する以前は兄弟との同調性が高い。2つ上の姉とピアノの発表会や家族で旅行に行く場合などの「お出掛け」の際に、「お揃い」の服装や髪飾りを装着している写真が見受けられた。

幼稚園入学と同時に、幼稚園の友人との同調性が「制服」着装義務により、上昇する。また、写真からは「制服」だけでなく、「私服」においても友人と類似した服装や装飾類において、「お揃い」を装着するなど、友人との同調性が高かった。

小学校に入学してからは、「私服」を着る機会が多くなったため同調率が低下するが、体操服や赤白帽といった学校指定の物を装着することで友人との同調性がある。兄弟との同調性は8歳(小2)を期に無くなる。

被服に自己意思を持ってから、12歳(小6)時は「私服」を友人と類似するものを自発的に装着するようになった。それ以降、中学校でも友人と「私服」においての同調がみられる。

高校に入ってから「制服」の着装義務により、高校時代全体で周囲との同調性は61回に上昇し、図4-5-1のグラフからも分かる通り、幼稚園時に近い上昇率を示す。しかし、61回

の内 14 回は自発的同調が含まれているという相違点がある。高校時においては、学校側が指定する「制服」を着装し、強制的に同調を促されている環境の中でも、新たに自発的同調が起きている。「制服」を一つのコミュニケーション媒体として、周囲の友人と同じような着装方法を取り、「着崩す」といった自発的同調があった。また、服装だけでなく、髪型、小物類も周囲と類似した物を所持し、積極的同調を行っていた。なぜそのように同調するのか。おそらく、「制服」よりもさらに上の「校則」という一つの基準点があることで、そこから逸脱し、他者とは異なる着こなしや髪型にすることなどは、客観的に集団内で「目立つ」、または「孤立している」とくみ取られるという不安感をもつと思う。例えば「人とは違う自分を演出したいが、不安がある。どうせ逸脱するならば、みんなで逸脱したら安心である上に、仲間意識が強化される」と考えた故の同調行動ではないだろうか。箱井(1999)も同調がもたらす効果について、次のように述べている。

一般的に私たちは、規範やルールに同調すれば、肯定的な結果を得ることができますが、逸脱すれば否定的な結果が生じることを知っています。被服に関する場合も同様に、個人に肯定的な結果と否定的な結果の両方をもたらします。肯定的な側面には、集団からの賞賛や仲間からの受け入れにともなう仲間意識の強化が考えられます。私たちは、横並びに画一化された制服集団や、同じような服装の人々の中にいると依存感が高まり、安心感を得ることができるのです(箱井 1999:118)。

同調することで得られる効果を考えた上で、高校時における同調行動によって、自分も集団の一員であるという演出を行っていたと考えられる。

では大学時はどうだろうか。大学時はそれまでと違い、指定の被服類は無くなる。しかし、他の学齢区分に比べ、同調性が高くなっている。同調性の対象としては、サークル活動の仲間や学校外の友人との同調性が上昇していることがわかる。サークル活動の仲間との同調は、サークル T シャツを着装するという伝統による受動的な同調である。その他の自発的同調では、成人式や友人との旅行時に多く確認された。普段とは異なる状況下において、ふさわしい自分を演出する上での同調であると考えられる。

同調性の推移をみる中で、母親によって被服を選択されていた時期は強制的に同調を促されていたが、社会的空間が拡大し、仲間集団が増え、人間関係が複雑に絡み出すとそれが自発的な同調に変わっていったようだ。同調することで集団や仲間からの賞賛あるいは

受け入れを獲得できるならば、同調はある意味、集団や仲間に対する「印象操作」であると思う。それが私の場合、中学、高校と順を追って広がりを見せており、他者との関係の中で「自分」を演出するようになったことが分かった。

## 5. 考察

写真データから0歳から22歳までの被服における自己呈示に関する情報を得ることができた。結果には「私」の自我形成や周囲との関係による変容が表れていると考えられる。それについてG.H.MeadとE.Goffmanの理論を基に詳しく考察していきたい。

### (1) 乳幼児期から小学校低学年までの「私」

乳幼児期から小学校低学年までの「私」は被服に対して自己意思を持たず、母親により被服を選択されていた。この時期は、「私」という人間を通して母親の自己意思が出ていたのではないかと考える。「私」は自分を自らの意思で呈示していなかったかもしれないが、外部に表れる自分自身についての認識を養う時期であったと思う。

その頃の自己呈示について、Stone(1962)を参考にしたい。Stone(1962)は、人間の初期の発達段階を、①前遊戯期、②遊戯期、③ゲーム期の3つに分け、被服や外見と自己概念の形成がどのように関連しているのかについて考察している(田中 2004)。私の場合、乳幼児期までの期間が「前遊戯期」と捉えられる。そして幼稚園から小学校低学年までが「遊戯期」にあたると思われる。

Stone(1962)によれば、前遊戯期の子どもたちは、みずから被服を選ぶことができず、彼らを世話している大人(多くの場合は親)が、彼らの考えで子どもに着装させる。結果として、被服はその子どもやその家族の特徴を他者に伝える手がかりとなる。非常に顕著なものが性別である。伝統的に男児にはブルーが、女児にはピンクの被服が選択される傾向がある。他者はその被服によって、その乳児の性別を判断し、「かわいい」とか、「活発で元気いっぱい」などと、その性にあつた反応を示す。そして子どもたちは、自分の外見に対して示される他者の反応を内面化していくのである(田中 2004)。乳幼児期における私の被服をみると、服装に関しては「ハーフパンツ」、「ショートパンツ」、「ワンピース」など多様に着装されているが、色に関しては「赤」や「ピンク」といった被服を着装していた。他には、「フリル」が付いた「ワンピース」や「レース」の飾りつけが付いた「靴下」、「リボン」の髪飾りなど、「女の子らしい」「可愛らしい」という印象を与える着装物を身

につけている。乳幼児期の「私」が家族以外の他者と出会う機会は多くない。そのため、他者と出会う場面では、特に「フリル」のついた「ワンピース」等の「女の子らしい」着装しており、そこで初めて会う他者の反応を通し、繰り返し、自分への性別認識を構築していったと思う。母親によると、当時の「私」は「女の子らしい」「可愛らしい」被服を着装することを好んでいたようだ。それは「私」の中に、自らが「女の子」であるという自己概念が形成されていたためだろう。「客我 (me)」に対する「主我 (I)」の反応が起きているといえる。

次に幼稚園から小学校低学年までにあたる遊戯期についてである。Stone(1962)によれば、この時期は、周囲の人々との相互作用のなかで、さまざまな社会的な役割を試し、それに対する他者からの反応に注意を向ける。児童にとって、特に重要な他者は、両親、教師、兄弟、友人などである。この時期にミードのいう「役割取得」を「ごっこあそび」を通して学び、性の区別を厳密に意識する(田中 2004)。この時期の「私」は、母親が化粧する姿見るのが好きで、母親が化粧をする横で子供用の化粧道具を使いながら、化粧の真似事を行ったり、装飾品を借りて「ままごと」をして遊んでいた記憶がある。自分自身が母親と同じ「女性」であり、「女性」は「綺麗」「可愛い」物を身につけるものだという認識を形成していったのだろう。遊戯期にあたる幼稚園から小学校低学年までは「スカート類」や「ズボン類」の着装がみられ、髪飾りの着装が多くみられた。また「赤」や「ピンク」の着装が多い。

被服への自己意思はもたないが、「ままごと」を通してであったり、「可愛らしい」「女の子らしい」被服を着装させられることで、客観的に自分自身についての意識を発達させていたのだろう。「女の子らしさ」などを学び、例えば「ままごと」をして遊ぶのは、一つに自分が「女の子」であるという認識を基に「演じている」ことの始まりであるように思う。この時期の被服は、母親により与えられた、自分を認識するための道具であると思う。Mead (1934=1973) のいう「他者の役割取得」を通じて、Goffman (1959) の「印象操作」の技法を学ぶ時期だったのだろう。

## (2) 小学校3年生から6年生までの「私」

小学校3年生から私は自分の被服に対して自己意思を持ち始めたと明示している。自分の意見を主張するようになってから、服装に関しては、「ズボン類」が、色に関しては暗色系統が圧倒的に増加し始める。これは当時の「私」が以前に比べ、自分を見つめる際の他者の視点を多く習得し、自分をより客観視できるようになったからではないだろうか。自

分が認識する自己概念に対応するような形で自己変容を行ったからではないかと考える。

小学校 3 年生から被服での自己呈示が変わったのは、母親により髪型をショートカットにされたことが一つの要因としてあると考えられる。「髪の毛がとても短いのに、スカートをはいたら変ではないだろうか」という、他者の目から見える「自分の姿」を気にするようになった。また、この時期からグラウンドで頻繁に遊ぶようになり、自分にとって最も動きやすい服装を考慮したことから、「ズボン類」が増加したと考えられる。そして「ズボン類」を着装するようになってからは、「スカート」を着装することに抵抗感を抱き、「スカート」をはく自分が想像できなくなっていた。これら全てにおいて自分自身を他者の視点から捉えることからの着装であったと思う。

小学校 4 年生以降もその流れは変わらなかった。しかし、小学校 3 年生とは異なり、小学校 4 年生になると「見られたい自己像」というものが芽生える。同級生に背が高く、美人な子がいて、その子がいつも大人っぽいお洒落な洋服を着ていることに憧れを抱き、自分も大人っぽい洋服を好むようになった。その際に私は「白」や「黒」が取り入れられた被服を着装するようになるが、これは私にとって身近な大人である母親が好んで着装していたことが影響していると考えられる。「大人っぽさ」の呈示を行う際に、母親の判断基準を参考にしたと考えられる。

小学校 5 年生になると、母と一緒に服を買いに行き、キッズブランドを意識した洋服選びをするようになる。2 歳上で、先に中学校に通っていた姉の影響を受け、靴もスニーカーではなく、ブーツを履いたりしてスニーカー以外にも興味を持って履くようになるのがこの時期からである。また、「学校に行くときの服装」や「友達と遊ぶときの服装」というように状況を判断して被服を選択するようになった。同級生の着装する被服に対しても、より興味を持ち始めるようになった。写真データより、周囲の人物で同級生の割合が増加するのも小学校 5 年生頃であることから、所属する社会集団との生活時間が長くなり、自己を呈示する対象として周囲の同級生の存在は大きくなっていったと思う。他者の被服にも意識を向け、自分の被服にも意識を向けていた。

小学校 6 年生からは、テレビでみた流行の服に興味を持ち、着装することが多くなった。また、同級生の服装と類似したものを着装することもあった。所属する社会集団の間で評価される被服が重要視されたためだろう。

小学校中学年頃から、以前と比べ、「他人から見られる自分」を意識して自己呈示を行うようになっている。また同年代の他者との関わりを通して、「見られたい自己像」がその都

度形成され、他者の影響から被服を選択し、被服を通じて「印象操作」を行うようになったと思う。この時期は、Mead (1934=1973) でいう、私の「客我 (me)」及び Goffman(1959) でいう「オーディエンス」は同属集団である学校の友人にシフトしていると考えられる。そして、それがより強固になるのが次にみる中学校時代、高校時代であると考えられる。

### (3)中学校・高校時代の「私」

写真データの結果より、中学校・高校時代の「私」は、被服において他者の影響を大いに受けていると思われる。服装や色の転換、同調性の上昇がこの時期に顕著にみられた。まずは中学校時代を振り返りたい。

私の通う中学校は、制服がなく、私服で登校していた。小学校時代から私は他者の被服に対する関心が強く、それは中学校に入学し、私服の学校であったためより影響を受けやすい環境にあった。この時期の私は仲間集団に対して「お洒落である」という印象を受けたいと考えていた。この時期の被服の特徴として、13歳(中1)における「ピンク」の上昇を初めとした暖色・寒色系統が頻繁に被服に取り入れられていたことや、髪飾りやスカートを再び着装したことである。

中学に入学し、お洒落な先輩や同級生に対して憧れを抱いたことや、友人の影響でファッション雑誌を読むようになってから、彼女らを模倣して古着ファッションをするようになった。おそらく Mead(1934=1973)の理論にある、子どもが母親のエプロンを着るなどの「ごっこあそび」を通じて「他者の役割取得」を行い、他者の立場で自分を発見することに通ずるのではないだろうか。つまり、手本とした他者の被服を模倣することは一種の「ごっこあそび」の発展した形であると思う。被服の模倣は、新たな自分になることが出来、自分を発見する手段であると考えられ、自我形成の流れとして捉えることができるだろう。

これを Goffman(1959)の演劇的視点で捉えるならば、手本とした他者を「演じる」ことで、それが次第にその人自身になる(例えば、被服に対する好みを手本とした他者のようになる)ということではないだろうか。演じる役目に対する不信から始まり、信へと流れることで自己を確立していったのだろう。つまり、他者の被服を模倣することで、当初はいつもと違った自分を演出していたが、他者の反応などを受け、それが自分自身そのものになっていったと考えられる。

そのように、中学時代の「私」は誰にも真似できない奇抜なファッションをすることが「お洒落である」という印象を、手本とした他者やファッション雑誌を読むようになって捉え、

被服においてピンクや青、水色などの暖色、寒色を着装するようになったり、ヘアピンを模倣して着装するようになったのだろう。

次に高校時代を考えていきたい。高校に入学してから「制服」着装義務により私服を着装する機会が減少した。しかし、「4-5. 同調性との同調性について」でも述べたように、自発的に友人と同調していた。これは周囲に対して自分がどのような集団に属しているかを、仲間集団に対して自分が仲間であることを「印象操作」したための同調であったと考える。それと同時に自分の振る舞いや立場などを、自分自身で再認識していたと思われる。

このように中学校・高校時代は、仲間集団に対して自分をどのようにみせるかを試行錯誤している呈示であることがわかった。仲間集団の価値判断を受けた上での自己意思の反映がこの時期の被服には起きていると考える。

#### (4)大学時代の「私」

では大学時代はどうだろうか。今までとは違い、大学は毎日同じ人に会うのではなく、自分を他者に接触する機会はほとんどなくなった。話す訳でもなく、すれ違うだけの人が大勢いる中で、「自分」という人間を表現するものに「外見」のかかる比重が高くなったと考える。そのことがこの時期の被服には呈示されているように思う。

私は、大学生になってから、家から学校まで通う間に電車内、駅、街中至る所で大勢の他者とすれ違う環境が変わった。また、アルバイトを始めたり、友人とだけで旅行に行くようになり、行動範囲が拡大した。そのため、この時期は、被服対して自己意思を持ち始めた頃と異なり、意識をする対象は「学校の友人」などの仲間集団だけに留まらず、より多くの架空の他者までも意識するようになったと考えられる。例えば、どのような服装を着て行くかを考える際にも、母や姉の意見を聞き、同年代の仲間だけでなく、幅広い層の他者からどのように見られるかを非常に気にするようになった。月に読む雑誌も昔は1冊だけだったのが、2, 3冊へと増え、学校内で見かける他の学生や、街中で歩く人に対して「どのようなコーディネートをしているのか」ということを観察したり、通販サイトを見るなどして、以前の倍以上情報収集を行うようになった。社会的空間の広がりに伴い、他者と接する機会が格段と増加したことから、「自分」を「印象操作」するために、他者の役割取得を複合的に得る必要があったためだろう。そのように情報収集を行った上で、「大学生」、「同志社大学生」、「〇〇歳」などの自分で認識する、自分の社会的地位や立場などを、他者からも同じように「大学生らしい」「同志社大学生らしい」「〇〇歳っぽい」という印象を

抱いてもらえるような被服を選択していたように思う。つまり、Goffman(1959)のいう「劇的具象化」を、被服を通して行っていたのである。暗色系増加や身体装飾の増加も、上記のような表出を行うためだったと考えられる。

私にとって、中学・高校時代のオーディエンスは友人であったが、大学時代は友人や見知らぬ他者変わった。そのため、私自身の認識する社会的地位や立場、パーソナリティなどをあらゆる他者に適切に印象形成をさせるために、大学時代の被服が多様化したと考えられる。

## 6. さいごに

「今日はどのような服装をしよう」。そのように日々考えを巡らす。考えている最中は自分をどのようにみせようか、自分の世界に没頭しているだろう。しかし、その自分を見つめる目は、他者の目であり、他者の価値判断を通して選択されていることに気が付いていない。私は自分の0歳から22歳までの被服を振り返り、改めてそれに気が付いた。自分がなぜその当時、そのような格好をしていたのか。当時は「自分の好みである」「〇〇のようにみられたいから」などと感じていた。しかし、実際は他者との関わりを通して、それが「自分の好みになった」のであり、みる他者がいることで自己を省みて変容させていたのである。他者との結びつきを通じて、自分を見つめなおす。成長とともに、社会化され、「自己」を変容し、それが外部に「被服」の形として表れているのだろう。属する集団、地位、環境、他者など様々な「状況」に応じ、「ふさわしい自分」を表現している。今後、自分で「自分」をどのように呈示しているのか。鏡を見つめ、ふと考えてみることで「自分を知る」ことができるかもしれない。

字数(40字×30行)

総ページ (30 ページ)

400 字詰め原稿用紙 60 枚

## 参考文献・引用文献

Goffman, E, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, PENGUIN BOOKS.

Flugel, J.C, 1930, *The psychology of clothes*, London, Hogarth Press.

Mead, G.H, 1934, *Mind, Self, and Society : from the Standpoint of a Social Behaviorist*,

The University of Chicago Press.(=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『現代社会

学大系 第 10 卷 精神・自我・社会』青木書店。)

Laver, J, 1932, *Clothes*, New York, Horizon Press.

Stone, G.P, 1962, *Human behavior social process*, Boston, Houghton-Mifflin Company.

井上俊・船津衛編, 2005, 『自己と他者の社会学』有斐閣.

神山進, 1996, 「1 章 被服心理学の動向」高木修監修, 神山進・大坊郁夫編『被服と化粧  
の社会心理学——人はなぜ装うのか——』北大路書房, P2-24.

桐田克利, 1988, 「ドラマとしての自己—自己呈示と自己変容」『社会学評論』39(1):45-58.

田中優, 1999, 「2 章 自己意識と着装行動」高木修監修, 神山進編『シリーズ 21 世紀の社  
会心理学 8 被服行動の社会心理学』北大路書店, P16-27.

箱井英寿, 1999, 「10 章 ティーン・エイジャーとファッション」高木修監修, 神山進編『シ  
リーズ 21 世紀の社会心理学 8 被服行動の社会心理学』北大路書店, P114-123.

船津衛, 1995, 「自我の社会学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波  
講座 現代社会学 第二卷 自我・主体・アイデンティティ』岩波書店, P45-68.